

## メッセージアウトライン

### コリント人への手紙 第二6:11~7:4 「心を開いて」

[11-13]「コリントの人たち。私たちはあなたがたに包み隠すことなく話しました。私たちの心は広く開かれています。あなたがたは、私たちの中で制約を受けているのではなく、自分の心で自分を窮屈にしているのです。私は自分の子どもに対するように言います。それに報いて、あなたがたのほうでも心を広くしてください」

「コリントの人たち」とパウロは親しく呼びかける。今までパウロが語ってきたことは、すべて彼の心を開いた愛から出たことばであった。ところがコリント人たちは、まるでパウロが彼らの自由を束縛するかのようになり、自分の心で自分を窮屈にしていた。そこでパウロは、自分の子どもに対するように彼らに「心を広くしてください」とさとすのである。しかし、彼らは、それは世間に合わせることだと誤解するかもしれない。それでパウロはそのような誤解のないようにと14節以下をつけ加えるのである。

[14-16a]「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。……」

「くびき」とは農耕などの時に、家畜と家畜の首の部分をつないでお互いに足並みをそろえて進ませるための道具。この場合、家畜は同じ種類でなければならない。→申命記22:10 ここでパウロが言いたいことは、信者と不信者とは根本的に両立しがたいものがあるので、その点において妥協したり合わせたりしてはならないということである。その理由として、パウロは5組のことばを対立させて読者に疑問を投げかける。①「正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう」②「光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう」③「キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう」…「ベリアル」とは、よこしまな者という意味であるが、そこから転じてサタンのこととして使われている。④「信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう」…一方は宝を天にたくわえ、他方は地上にたくわえる。一方は来たるべき世に望みを置き、他方はこの世に望みを置く。一方は神の栄光を求め、他方は人間の誉を求める。⑤「神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう」…「神の宮」は天地の創造主である真の神のみが臨在される場所。人間の手で造った偶像などは全くかかわりがない。さらにこの箇所と関連させてパウロは、「私たちは生ける神の宮なのです」と展開する。→ I コリント6:19、3:16~17

[16b~18]16節は旧約のレビ記26:11~12の引用。他にエゼキエル37:26~27、出エジプト29:45パウロはここを神がクリスチャンの心の中に住まわれる約束として教えている。

17~18節のことばはイザヤ52:11とエゼキエル20:34とホセア1:10を結び付けて引用したもの。神の民が昔、偶像礼拝に逆戻りしたことがあったが、そうしたことを避け、離れるようにといたのである。神がクリスチャンの心の中に住まわれる以上、不信者とつり合わぬくびきを一緒にすることはできない。しかし、この世から離れるといっても、それは霊的な意味であり、心のあり方を指すものであることを覚えておかなければならない。→ I コリント5:9~11

[7:1-2]「愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、い

っさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。私たちに対して心を開いてください。……」

この世的なものから離れる時、神が私たちを受け入れてくださり、父となってください。クリスチャンはこのようなすばらしい約束を与えられているので、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこみ、聖きを全うすべきである。2節でパウロは今ひとたび、コリント人たちに心を開くようにと訴えている。ここで彼は自分たちがどのような者であるかを三つの否定のことばをもって説明している。①私たちはだれにも不正をしたことがなく、②だれをもそこなったことがなく、③だれからも利をむさぼったことはありません。パウロたちはかつてコリントにいた時、このような不正をしたり、むさぼったりしたことはない。それゆえ、あなたがたも心を開いて、自分たちを受け入れてほしいと言うのである。

[3-4]「責めるためにこう言うのではありません。前にも言ったように、あなたがたは、私たちとともに死に、ともに生きるために、私たちの心のうちにあるのです。私のあなたがたに対する信頼は大きいのであって、私はあなたがたを大いに誇りとしています。私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています」

コリント人たちへの熱い思いは常にパウロたちの心のうちにあり、その一体感と愛は、ともに死に、ともに生きると言われているほどであった。パウロを誤解し中傷する者もあったが、それでも彼のコリント人たちに対する信頼は変わらない。この信頼は愛から出たものであった。また彼は彼らのことで慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びにあふれているとすることができた。パウロばかりではなく、すべてのクリスチャンにとって主よりの慰めと喜びはどんな苦しみにも耐えさせ、乗り越えさせる力となるのである。

今日の個所から教えられることは、クリスチャンは常に心を広く開いていること、言い換えれば偏見や人のうわさ、独りよがりなどで自分で自分の心を窮屈にしないこと、相手をそのまま受け入れること、愛することである。また不信者とつり合わぬくびきをともにしないこと、霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うすることである。私たちもこれらのことを実行し、みこころを行う者になりたい。